

大学教育における児童文学作品の活用(6)

— エーリヒ・ケストナー『点子ちゃんとアントン』から —

Utilization of Juvenile Literature Works in University Education (6)
— Based on “Dot and Anton (Pünktchen und Anton)” by Erich Kästner —

茶谷 薫 CHATANI Kaoru
(芸術教養領域)

はじめに

本誌前号等で述べたように、子ども向けの小説やマンガ作品から学べることは多数ある^{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8)}。子どもの頃は漢字をはじめとする文字、単語、熟語、諺といった基礎的な言葉の知識から、物語に出てくる様々な分野の知識、登場人物などの気持ちの推測、ある程度文法に沿った論理的な言葉の並べ方、そして文章から場面や人物の動きなどを頭の中で想像する力、などである。基本的には大人になっても同様である。ただし、幼少期とは異なり、大人には過去を振り返る点および得た知識を統合する点で学びの幅は広がるだろう。

本稿では児童文学作品のうち、エーリッヒ・ケストナーの『点子ちゃんとアントン』について簡単に紹介した後、この邦訳版を題材にした授業で活用可能な内容を列挙する。なお、本稿では、公立図書館などで所蔵数が多く、手に取りやすい池田香代子が訳したもの(2000年初版、岩波書店)を底本とする⁹⁾。邦訳の概略については次節で述べる。

『点子ちゃんとアントン』の著者、邦訳版

『点子ちゃんとアントン (Pünktchen und Anton)』(以下、『点子…』)は第二次世界大戦よりも前、アドルフ・ヒトラーの国家社会主義ドイツ労働者党(ナチス)が躍進しつつあったヴァイマル共和政下の1930年に出版された児童小説である。作者は児童文学に関心を持つ人ならば誰もが知るエーリッヒ・ケストナー (Erich Kästner) である。

ケストナーが執筆した最初の児童小説は、これも世界的に有名な『エーミールと探偵たち (Emil und die Detektive)』で、『点子…』はそれに続くケストナーの二作目の児童小説である。『点子…』を最初に邦訳した高橋健二は、この作品について「つぶぞろいのケストナーの作品の中でも、いちばんよくまとまっている」と評した¹⁰⁾の『訳者のあとがき』。両作品とも何度も映像化、舞台化されてきた。

次にケストナーの生涯の概略をケストナー自身¹¹⁾および高橋¹²⁾の著作に基づいて説明する。ケストナーは1899年、現在のドイツ東部のザクセン州にあるドレスデンで生まれた。父は鞆作りの手工業者だったが、産業構造の転換により手工業需要が縮小し、工場労働を

余儀なくされた。その低賃金では生活が苦しかったため、母は散髪業で家計を補った。ケストナーの実の父がユダヤ人の医師だという説もある。ケストナーは教師養成のギムナジウムに入り、第一次世界大戦で召集された。これらの体験から学校や軍隊への反発心を抱き、ライプツィヒの大学に進んだ。在学中から新聞の編集をしながら、詩、舞台批評を執筆し、卒業後ベルリンで詩人として社会的に認められた。『エーミールと探偵たち』、『点子…』以外にも『飛ぶ教室』、『ふたりのロッテ』など、児童小説の世界的な名作を発表するとともに、大人向けの文学作品も著した。ケストナーはナチス政権下で執筆制限を受け、著作が焚書されもした。第二次世界大戦末期、ナチス政権は崩壊したが、その後は東西冷戦でドイツは二つの国に分離された。ケストナーは西ドイツの文壇でペンクラブ会長を務めるなど華々しい活躍をした。一方で、ケストナーの母親は東ドイツの一部となったケストナーの生誕地・ドレスデンに残された。冷戦で引き裂かれた親子である。ケストナーは事実婚相手のルイーゼロッテ・エンダーレと長く暮らした。内縁の妻の名に因み、ケストナー作品の『ふたりのロッテ』の双子の女子がルイーゼとロッテとなっている。ケストナーは1974年に死去した。

ここからは『点子…』の邦訳について説明する。本稿の底本とする池田香代子の邦訳版⁹⁾は、岩波書店が新装版「岩波少年文庫」の60番目のものとして2000年に発刊したものである。「岩波少年文庫」は、岩波書店が児童文学作品の名作をソフトカバーの文庫版に収めたものだ。縦18cm弱、横13cm弱のサイズで、大人向けの文庫本や新書よりも大きい。岩波書店は「岩波少年文庫」を新装版にした際、それより前に同社が出版した少年文庫やハードカバー版と同じ訳文を載せた場合もあるが、『点子…』では長年出してきた高橋健二訳から池田訳に変えた。高橋訳には、2000年当時の子どものみならず、親世代でも理解し辛い言葉や、差別的な言葉があったからかもしれない。

高橋健二は『点子…』をはじめとするケストナー作品の邦訳や評論等で知られる。ドイツ文学者で、ケストナー以外にもヘルマン・ヘッセ、グリム童話とグリム兄弟、ゲーテなどに関する著作や翻訳が多数ある。高橋訳の『点子…』も池田訳と並び、本稿執筆時の2024年段階でも、各地の公立図書館や小学校の図書館で所蔵されている。これは岩波書店の『ケストナー少年文学全集』（全9冊）の第3巻である¹⁰⁾。1962年が初版で、何度も増刷されたハードカバーかつ函入りの豪華版だ。ただし高橋訳の『点子…』は、この版よりも遙か前、1936年に山本有三が編纂した『世界名作選1 日本少国民文庫 第14巻』（新潮社）に『點子ちゃんとアントン エーリヒ・ケストネル』として存在していた。この書籍には、『点子…』以外の様々な作家、翻訳者による物語や詩等が掲載されている。戦後の1950年、同じく新潮社より出版された『世界名作選1 日本少国民文庫11』にも、高橋訳の『点子…』収められている。この本は同じ新潮社から1998年、2003年に復刊され、公立図書館にも所蔵されている場合がある。この復刊版では、漢字の旧字体を新字体に、かつての仮名遣いを新仮名遣いにし、判型も変更されたこと等が末尾に記されている。他

にも、ルビが振られている点や、訳者としての高橋の短い解説の文章量等が岩波書店から出された高橋訳版と異なる。他にも高橋訳の『点子…』は、1955年に岩波少年文庫(96)、1959年に講談社の『少年少女世界文学全集23(ドイツ編6)』、1965年に小学館の『飛ぶ教室(少年少女世界名作文学全集50)』、1969年の講談社版『点子ちゃんとアントン(国際アンデルセン大賞名作全集5)』などに収められている。

他に、1965年に講談社から塩谷太郎が訳した『点子…』が出版された(世界の名作30)。同年、小学館からは植田敏郎が訳した『点子…』などが収められた『少年少女世界の名作文学32(ドイツ編6)』が出版された。植田訳の『点子…』は1967年には旺文社の『旺文社ジュニア図書館2』として出され、そこにはケストナーの年表等が掲載されている。植田訳版は、ぎょうせいの『点子ちゃんとアントン(少年少女世界名作全集35)』(1982)もあり、植田による解説にはケストナーと二度食事を共にした際の思い出が記されている。1966年に集英社から出された『世界文学全集 20世紀の文学 第37(ウッドハウス、マルセル・エイメ、ジャック・ベレー、イリフ、ペトロフ、ケストナー)』に『点子…』が板倉鞆音訳で収められている。これは1995年に新装版が、2000年にその再版が出された。他にも1968年、ポプラ社から『飛ぶ教室(世界の名著19)』の中に、タイトル通り『飛ぶ教室』とともに『点子…』の高木卓訳版が収められた。

あらすじ・構成

『点子…』はタイトルにある「点子」という少女と、アントンという少年が主要登場人物である。点子(Pünktchen)の本名はルイーゼ・ポッケで、幼い頃は小さかったため、小さな「点(Punkt)」という喩えから与えられた愛称である。父親がステッキ工場の経営者のフリッツで、ポッケ家は裕福である。ただし、母親は毎日のように外出し、父親も仕事に忙しく、家庭的には寂しい。その両親に半ば育児放棄されている点子は、広大なポッケ邸で調理など家事を中心に働くメイドのベルタと、点子の養育係のアンダハト、飼い犬のピーフケ、門番の意地悪な息子であるゴットフリート・クレッパーバイン達に囲まれて育っている。

『点子…』のタイトルで、点子と並び記されているアントン・ガストは母子家庭の貧しい少年で、母は家政婦をしている。物語では母親は病気で床に臥せり、アントンが代わりに食事の用意をしている。貧しい家計を懸念するアントンは、家賃・食費などの捻出に悩む。アントンは夜な夜な、繁華街のヴァイデンダム橋の上で靴紐を売り、日銭を稼いでいる。家事と仕事に追われ、心配が尽きないアントンは学校の勉強どころではなく、試験や授業態度が全く芳しくない。アントンの事情を知らない担任のプレムザーがアントンの母に注意喚起の手紙を送ろうとしている。この担任にアントンの苦境を伝え、母子関係が良好に保たれるよう、手紙を出すのを阻止したのが点子だ。

点子とアントンは学校も居住地域も異なるが、夜にヴァイデンダム橋で「物売り」を

し、知り合ったのだった。この橋はベルリンの市街を蛇行するシュプレー川にかかっている。アントンは母には内緒で前出の物売りをし、点子はマッチ売り兼物乞いをしているのだった。点子は人々の憐れみを誘い、お金を得ている。経済的に豊かな点子をそのようにさせているのは、家庭教師のアンダハトである。アンダハトは点子の盲目の母親役を演じ、通行人の憐れみを増幅させている。偽の哀れな母子を演じて手に入れた金銭を、アンダハトは恋人のローベルトに貢いでいるのだった。二人のマッチ売り稼業については、点子の両親のみならず、ベルタも知らない。

この秘密を、ゴットフリートは卑劣な手段で点子の父親に売った。事実を目撃した点子の父親は驚愕し、悲しむ。ただし、これを契機に妻（点子の母親）との関係も良好なものになりそうである。一方、ローベルトはアンダハトを利用し、ポッグ邸の内部情報を得、窃盗目的で邸宅に侵入する。このことを推測したアントンはベルタに警告する。ベルタの活躍でポッグ邸は窃盗被害を免れた。ローベルトも逮捕された。アントンの活躍に感謝し、娘の気持ちを考えたポッグ氏は貧しいアントン母子を邸宅に住まわせることを決意し、家族に伝える。点子は大喜びで、物語は大団円を迎える。

『点子…』は物語の軸である16の章で構成されている。その本文の前後に作者による前書き、後書きが付されている。また、各章の最後にケストナーが作者として、そして貧困で苦しんだ経験を踏まえた良識のある大人として、主に登場人物についての論評を加えている。この論評の表題は、原書では「Nachdenkereien」（直訳では「反射」）となっている。「Nachdenkereien」は、池田訳では「立ち止まって考えたこと」とされた。高橋訳では「第○の反省は」（○には当該章番号が漢数字で表記されている）だ。ちなみにNachdenkenは分離動詞の「熟考する」で、前綴りのNachは「後、追う」、動詞（基礎動詞）のdenkenは「考える」の意味がある。訳者の池田も高橋も、若い読者に意味が伝わるよう、翻訳を工夫していることが伺える。また、巻末に訳者のケストナーや物語についての解説が記されている。

授業で活用できる具体例

『点子…』で学べることについて、以下に幾つかの例を挙げる。

地理および歴史

前述の「あらすじ」で述べた通り、物語の舞台はベルリン（Berlin）である。それが明確に表現されているのが『点子…』の第六章である。古来、ベルリンをはじめとする都市の物流を支えベルリン市街地を蛇行するシュプレー（Spree）川、それに掛かるヴァイデンダム橋（Weidendammer Brücke、柳の堤橋）、フリードリヒ街駅（現在のベルリン＝フリードリヒ通り駅、Bahnhof Berlin-Friedrichstraße）、ウンター・デン・リンデン（Unter den Linden、菩提樹の下）にあるオペラ劇場などベルリンの中心街が記されてい

る。劇場や広告のイルミネーション、バスや自動車のヘッドライト、汽車、大勢の人々が行き交う様子などが活写されており、第二次世界大戦の空襲で焼失する前のベルリンの活気が伝わる。もちろん、東西冷戦中に建設された「ベルリンの壁」も、ソビエト連邦を始めとする東側諸国の経済的行き詰まり等から発した「ベルリンの壁崩壊」も、物語よりも遙か先のことである。

池田は巻末の訳者あとがきで、帝国議事堂河岸にあるポッケ邸はベルリンの「どまんなか」、ブランデンブルグ門にも近く、パリ広場とシュプレー川の間にある、戦後は大使館街になったところと推測した。ここは第二次世界大戦で空襲被害が大きかったという。点子和アンダハトが犬のピーフケを連れアントンのボロアパートに向かう場面の道筋についても池田は、ポッケ邸の「川向う」に実在するシフバウアーダム（船大工堤、Schiffbauerdamm）を少し行ったところにあるアルティラリー（砲兵隊、Artillerie）通りだと解説した。この辺りは貧民街で、第二次世界大戦中の銃撃痕が残された建物があるとも池田は述べた。アントンの住所よりも更にポッケ邸から遠い側にはユダヤ人街があり、2000年現在も小さな店やアパートのある下町だとも記した。

富裕層と貧困層の住居が離れていないのは、徒歩で家政婦や門番が通勤するためであり、物乞いも貧富の差が激しいところで成立する、とも池田は述べた。この点で、安価な公共交通機関が発達している都市部では郊外居住も可能な現在とは異なるかもしれない。ただし、派遣労働や「隙間バイト」、スマートフォンのアプリでスクーターや自転車などで宅配サービスを行う人々は、短時間の不安定な仕事にアクセスするため、都市部に住まざるを得ない。この点では戦前のベルリンの状況と似ているだろう。

池田は、物語が出版された頃はドイツの恐慌があり、貧困層の苦難を背景とした革命騒ぎや暴動、ナチスの議席数伸長などがあったと解説した。物語の本文でもアントンの散髪を床屋で待つ点子がピーフケの髭剃りごっこをした際に「不景気ですなあ」と裁判所の差し押さえについての会話を想起させる台詞を述べる場面がある。ケストナー自身の解説には、フランス革命時の王侯貴族と庶民の認識の差や、ロストックで見た我儘な子どもの様子から、富裕層が貧困層の救済を考えるべきだという主張がある。貧困問題は100年経った現在の日本でも形を変えて同種のものがあると言えよう。

『点子和…』に出てくる通貨の話も学びの契機となるだろう。具体的にはマルク（Mark）、ペニヒ（Pfennig）、グロッシェン（Groschen）といった言葉が見られる。これについては欧州やドイツの複雑な歴史が背景にある。鈴木潔の論考には複雑なドイツ通貨の統一の歴史や当時の通貨価値がどのようなものであったかが詳しく記されている¹³⁾。他の多くの国同様、ドイツは現在のドイツのように統一された国家ではなかったこと、欧州は地続きで交易が盛んだったこと、などが複雑さの理由である。『点子和…』の時代は1930年頃のヴァイマル共和政だったため、1871年のドイツ通貨がマルク・ペニヒに統一された後となる。鈴木に拠れば、1ターラーが3マルク、1グルデンが1.71マルクの換算だった¹³⁾。

1 グロッシュェンは10ペニヒ硬貨のことで、小銭やはした金を指す¹⁴⁾。欧州のこののみならず、日本の江戸期においても、金などの含有割合が変化し、経済と互いに影響し合ったことや、江戸期の通貨が明治維新後、現在に繋がる「円」に統一されてきたことなどの歴史と合わせれば、深い学びに繋がるだろう。

その他にも学びの契機が多数ある。例えば、アントンがインク壺にペンの軸を浸すシーンがある一方で、家計簿にはノートと鉛筆を用いるシーンは、何故ペンと鉛筆の違いがあるか、を調べることが欧州における書き物の意味を理解するのに役立つ。アンダハトが点子に読み聞かせをするシーンでは『アラビアンナイト』、『グリム童話』が出てくる。当時の出版文化や、中東の文化が欧州に伝わったこと、メルヒェンの受容、子どもへの読み聞かせがこの頃、既にあり、それが日本にも広がった近代文明の一つの表れであることなどが学べる。

アントンが電話帳を料理店で借り、電話室でお金を払ってポッケ邸に電話するシーン、ハンドル式のポータブル蓄音機で音楽を鳴らしベルタが警官と踊るシーン、セントラルヒーティングのスチーム暖房がポッケ邸にあるとベルタが思うシーン、ツェッペリン飛行船を見上げるようにする点子、など物語の本文からかつての最先端の機器などが伺え、これらも学びの入口となろう。

格差

『点子…』は前項で記したようにドイツが経済的に疲弊し、貧富の格差も大きな時代を描いた作品だ。タイトルの二人の主要登場人物は貧富の格差を象徴的に表してもいる。社長令嬢である点子は父の作った広々とした、屋根裏部屋を入れれば4階建ての豪邸に住む。革張りの椅子や高額費用をかけた壁など、家具や内装も豪華な家だと思われる描写がある。父の運転手付き自家用車のメルセデスのリムジンが時々、点子の学校へ迎えに来る。同級生も比較的恵まれた階層の子女であるようだが、それでも当時は珍しい自動車に乗る機会があるわけではなく、点子の家庭が如何に経済的に恵まれているか、当時の読者には強く伝わただろう。豪邸や自家用車のみならず、点子の家には屋根裏部屋に住み込むメイドや、門番、運転手の他に、住み込みの養育係までいるのだ。養育係が来る前は子守がいた設定だ。家の中に多数の人間を雇える経済的に豊かな点子の両親は、美しく高価な衣服に身を包み、総領事など社会的に高い地位の人間と付き合い、高額のボックス席でオペラを鑑賞する。

片やアントン母子はシュプレー川の対岸の一角にある古いアパートの5階に住んでいる。点子とは通う学校も異なる。同じ学校には点子の家の門番の息子がいる。ノミに寄生されている子どももいる。ケストナーは、貧困層の子どもが多い学校の様子をさり気なく描いたのではないだろうか。アントンは社会福祉を受け、子ども食堂のような場（簡易食堂）で食事を摂っている。アントンが散髪に行く近所の床屋のハーベスクは、彼の貧窮を

知り分割払いで良いと伝えるシーンもある。

玄関の敷物や暖房も異なる。ポッケ邸はココヤシの繊維を編んだ絨毯とセントラルヒーティングスチームの暖房で、アントン宅は藁で編んだマットと石炭ストーブだ。ポッケ邸ではメイドのベルタが一息入れる時にソーセージ入りのパンを食べるが、アントンは食材の調達にも不安を感じ、百グラム程度のソーセージすら中々買えない。点子の父は肥満で、シュークリームなどを医師から禁止されており、現在でいうところの生活習慣病である。当時、それほどの肥満になれるのは、かなりの富裕層だからだ。また、ほぼ同年代と推測されるアントンと点子の知的資産の差も描写されている。例えば、アントンが知らない「コロブスの卵」の話も点子は既に知っているシーンからは、現在も恵まれた階層が知的資源へのアクセスがしやすいことを想起させられる。ポッケ邸のメイドのベルタの弟はアメリカにいるという一節があるが、これはベルタの家庭が然程豊かではないため、欧州から見れば新天地のアメリカに出稼ぎか移民をしたのだらうと思わされる。

以上のように、経済的に不安を抱えた現在から約百年前のドイツの大都市では大きな格差があり、それは今の日本にも通じることが分かる。つまり、人々の困窮、給食でお腹を満たす子どもについて語られている2024年の日本でも重要なことが記されている^{15, 16)}など。

家族

『点子…』において、作者のケストナーはこの物語を親に読んでほしい、と書いている。ケストナーは親子関係、家族の問題を物語の力で解決したいとも思っていたのだらう。

これは現代日本にも通じる家族の問題でもある。経済的には何の問題もない点子の家では、父と母は全くの擦れ違い生活を送り、母がカップルで出かける必要がある時に父が仕方なく付き添う形である。何でも従うポッケ氏に、夫人は不満を抱いている。ポッケ氏が多数の薬を服用し、不眠である、という描写も生活習慣病だけではなく、精神的な不安を抱えていることを暗示しているのだらう。これはケストナーが意識的に描いているのではなく、天才的な直観なのかもしれない。

父も母も点子のことは大切に思っているものの、点子は面倒を見てくれないと不満を抱いている。父は仕事に忙しいため、育児に関われないのは理解できても、仕事もなく、家事の手間もかからない母は外出ばかりし、育児をしてくれない、と点子が述べるシーンもある。二人の育児放棄が、アンダハトが点子連れ哀れな盲目母子のふりをしたマッチ売りに駆り出す結果を招いたわけだ。点子が双子だと良かった、と話すシーンが幾つかある。それは兄弟姉妹がいない寂しさを暗示しているのかもしれない。また、点子は自身が双子だった場合、父は自分と双子の片割れの見分けがつかないだらうと述べるシーンもある。瓜二つの一卵性双生児であっても日常的に接している人は見分けられる。しかし、ポッケ氏が娘たちを見分けられないだらう、と点子が冗談のように話すことには、父の育

児放棄について、無意識に不満を表す描写なのかもしれない。ただし、ポグゲ氏は物語の最後で点子を学校に迎えに行き、遊園地に付き合うといった形で、子どもと向き合おうとする姿が描かれている。

ポグゲ親子に比べ、アントン母子の関係は良好だ。ただし、母の誕生日を忘れたアントンに、ガスト夫人は非常に冷たい態度を取り、母子関係は危機を迎える。しかし、ガスト夫人は反省し、アントンも誕生日を忘れた自分の愚かさを責め、母子関係は修復する。訳者の池田は、各章の後に付されたケストナーの登場人物評について、批判されていない人物はベルタとピーフケ、ガスト夫人だけであり、アントンへの冷淡な態度を取ったガスト夫人は物語の中で反省し、物語外での、ケストナー自身からの批判的になっていない、と喝破した。池田は、ケストナーはガスト夫人を特別扱いしており、その理由として彼女にケストナーの母親を重ねているからだだろう、とも述べた。貧しい中でも息子を大切に、真面目な生活を送る母親は、ケストナーのみならず、多くの近代人の抱く理想の母親像であろう。

対照的に、ケストナーから批判されている点子の母親は夫の稼ぎで楽をしながら、子どもも放置し遊び歩いているという、現代日本でも批判されがちなキャラクターだ。一方で仕事はあるとはいえ育児放棄のポグゲ氏について、ケストナーは礼賛する。「イクメン」という言葉があり、男も育児休暇を、という状況の現代日本ではポグゲ氏への評価は分かれるところだろう。父が仕事に、母が家事と育児を、という近代家族のあり方は、牟田和恵らが述べるよう近代国家の一種の装置の役割を果たしてきた¹⁷⁾。現在、そしてこれからの変化により、近代国家も、その維持装置も形を変えていく可能性がある。このことを念頭に置きながら生き方を考える必要もあろう。以上のようなことを、大学生をはじめとする大人がディスカッションすることも重要だと思われる。

ことば

『点子…』はドイツ語で記されたため、独語の意味が分かれば、より一層物語を深く味わえ、興味関心も広がる。地名については別項に記したため、氏名について以下に例を挙げる。点子は点（Punkt）に、小さく愛らしいを意味する縮小辞の「chen」が付されたもので、まさに「点ちゃん、点子ちゃん」というニュアンスだ。アントン（Anton）はアントニウスから派生した欧州の男子の比較的一般的な名前である。ポグゲ（Pogge）はドイツ系の名字で、魚類の一種の意味もあるという。ガスト（Gast）は英語の guest と同語源の、「客」という意味である。訳者の池田によれば、クレッパーパーバイン（Klepperbein）は「駄馬の骨」、アンダハト（Andacht）は「一途な思い」の意だという。アンダハトは「敬虔な気持ち」や「短い礼拝」の意もあり、このキャラクターは恋人の悪事に手を貸すが、本来は敬虔な人か、一途に恋人を思ったためか、という意がケストナーにあったのかもしれない。アントンの同級生の名字のナウマン（Naumann）は、ナウマンゾウの研究者と

して良く知られる、明治政府のお雇い外国人の名字と同じである。

2000年に翻訳された当時の言葉のうち幾つかは、本稿執筆時の2024年では伝わりにくくなっているだろう。例えば「拍子を取る」、「めっぽう（滅法）」、「小ぬか雨」、「おかんむり」、「肝油」、「鉄剤」、「脳天」、「甘いボンボンの雨が降るように」、という表現である。

また、本稿では省くが、高橋訳と池田訳を比較するだけで、差別的な言葉が温和なものに変わったり、様々な単語が漢字からカタカナになったり、今の日本では滅多に見られないもの（例えば靴下のサスペンダー）の記述が省かれたりしていることが分かる。つまり現代の日本語における変化も学べる。

イラスト

ケストナーの全ての作品の表紙や挿絵を描いたのがヴァルター・トリアー（Walter Trier、ウォルター・トリアー）である。ケストナーよりも年長の1890年生まれで没年は1951年である¹⁸⁾。チェコのプラハ生まれのユダヤ系の人だ。プラハ、ミュンヘンで美術を学んだ。その後、雑誌編集者の強い勧めでベルリンに移住し、雑誌などのイラストを描いた。1920年代の後半、知人からケストナーに紹介され、『エーミールと探偵たち』の表紙や挿画を描いた。ドイツがユダヤ人排斥、ファシズムを強める中、ロンドンに移住した。第二次世界大戦中は英国の情報機関に協力し、反ナチスのチラシを作ったり、政治宣伝を行ったりした。戦後、イギリス国籍を取得したが、娘のいるカナダのトロントに移住した。

彼はケストナー作品の表紙や挿画だけではなく、有名な雑誌に欠かせないイラストレーターでもあった。この点では筆者の所属する芸術大学の学生には特に重要なことだろう。また、チェコのプラハからミュンヘン、ベルリン、ロンドン、トロントと遠くに移住し続けた彼の人生は、勉強や就労の機会の不公平や、人種差別的な政策、戦争の影響などを無視することはできない。この点も学びの入口となろう。

その他

物語の本文とは別に、各章の最後に付されたケストナーの文には科学的な興味を喚起することも記されている。例えば、カエルの腿の筋肉が電気で痙攣することを発見したルイジ・ガルヴァーニ（Luigi Galvani）についての記述がある。これは、神経細胞や筋肉細胞の生理的な仕組みの研究の端緒であった。他にも、オーギュスト・ピカルル（Auguste Piccard）が気球で成層圏を目指したり、犬糧の隊列で北極点を探検したりすることである。

仕草や身体描写は日欧の文化差を感じさせる例である。欧州では、他者の前でも親しい相手を抱きしめたり、キスをしたりすることは良く知られているが、例えば頭髮だけではなく手の甲をなでる場面があるのも興味深い。また、嬉しさの余り点子がアント

ンの耳を引っ張るシーンや、喜びや得意気な気持ちを表に出さないために点子がテーブルの下で自分の脛を抓るシーンがある。アンダハトが恋人にぞっとして耳がヒクヒクする、恋人に脅されたアンダハトが足を挫いたように情けない声になる、なども日本では余り見られない表現もある。

大人の学びに有益な児童文学

前節でまとめたように、『点子…』は、読み手に様々な分野への興味を抱かせる作品でもある。つまり「総合的な探究」やアクティブラーニングにも適したテキストである。

私事であるが、筆者は小学生の時に『点子…』の高橋訳を学校の図書室で読んだ。その頃は、アントンが『フランダースの犬』や『マッチ売りの少女』の主人公が苦しめられている貧困の状況に似ていると感じたり、点子やアントンをはじめとする人物の高潔な行動に感心したりする程度であった。大学生の頃、そして大学教員になってから、再読したところ、子どもの頃には気付かなかったことが多々あることが分かった。特に、物語の舞台となったドイツの歴史と物語の関係、夫婦関係や恋人関係の問題が作品成立から約百年経っても大きな変化がないこと、自動車や電話など近代的な産物の状況などである。また、ケストナー自身が大人としての視点で登場人物評をしている内容も、子どもの頃には理解できなかった。

ケストナーは、物語の中でも描いてきたように貧困者の救済や互いに敬意を持つ関係の重要性の指摘、母が病床にいる時は息子が家事を代行することに好意的であることなど、近代的な理想主義者の一人である。前節で記したように、ボグゲ氏の頻繁な薬剤服用や不眠などの描写も、近代の暗い面を無意識にせよ描いた感性の鋭さも併せ持っている優れた作家である。人を幸せにすることがどんなに幸せかを知って欲しいと記した点でもケストナーは善なる人だ。しかし、門番の意地悪な息子を非難し、悪人の中に備わっていない物を引き出すことはできない（良い人に育てることはできない）、と述べた点には、現代では疑問符が付くことかもしれない。法務省のWEBサイトには犯罪の原因として「犯罪者の個人的素質や規範意識の程度、その育った家庭や教育環境、犯行時の社会的環境等多様な要因が絡み合」い、単純な原因説明はできないが、「特に重要と思われる」ものとして、「親の指導力の低下、不況による就業の困難化、非行少年と一般少年に見られる意識の変化、少年を取り巻く環境の変化」が挙げられている¹⁹⁾。また幼い頃の虐待などの逆境体験を持つ人が少年犯罪者に多い可能性がある²⁰⁾。『点子…』はフィクションであり、門番の息子も実在の人ではないが、ケストナーが現在の知見を持てば、悪人について、このように突き放した書き方はしなかったのかもしれない。このことは現在の社会においても重要な視点であり、学生のみならず社会人が考えるべき大きなテーマでもあり、『点子…』が提示する最も重大な問題なのかもしれない。

謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および令和4（2022）年度特別研究費（課題名「高大接続教育、大学教育、社会人教育における児童・ヤングアダルト文学作品およびマンガ作品の教材としての利用」）の助成を受けた。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にも感謝する。

文献および註

- 1) 茶谷薫、2020、大学教育における児童文学作品の活用(1)—カニグズバークとリンドグレーンの生涯と作品から—、名古屋芸術大学研究紀要41巻 107-121
- 2) 茶谷薫、2021、大学教育における児童文学作品の活用(2)—山中恒『はくがはくであること』から—、名古屋芸術大学研究紀要42巻 157-166
- 3) 茶谷薫、2021、「学習マンガ」ではなく「娯楽マンガ」を教材利用する意義—『スター・レッド』を例に—、名古屋芸術大学教職センター紀要9号、1-13
- 4) 茶谷薫、2021、娯楽マンガ作品を教材に—『暗殺教室』に描かれた理想の教師・学校像—、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要10号 63-75
- 5) 茶谷薫、2022、大学教育における児童文学作品の活用(3)—後藤竜二『算数病院事件』から—、名古屋芸術大学研究紀要第43巻 143-157
- 6) 茶谷薫、2023、娯楽マンガ作品を教材に(3)—山田芳裕作『望郷太郎』—、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要11号 83-94
- 7) 茶谷薫、2023、大学教育における児童文学作品の活用(4)—古田足日『宿題ひきうけ株式会社』から—、名古屋芸術大学研究紀要第44巻 163-178
- 8) 茶谷薫、2024、大学教育における児童文学作品の活用(5)—佐野美津男『午前2時に何かがくる』から—、名古屋芸術大学研究紀要第45巻 109-122
- 9) エーリッヒ・ケストナー、池田香代子訳、2000、点子ちゃんとアントン、岩波少年文庫060、岩波書店
- 10) エーリッヒ・ケストナー、高橋健二訳、1962、ケストナー少年文学全集3 点子ちゃんとアントン、岩波書店
- 11) エーリッヒ・ケストナー、高橋健二訳、1958、わたしが子どもだったころ、みすず書房、(1962に岩波書店のケストナー少年文学全集7巻に収録、岩波少年文庫628では、2023に池田香代子が訳した際、はくが子どもだったころ、に改題された)
- 12) 高橋健二、1981、ケストナーの生涯—ドレースデンの抵抗作家—、駸々堂出版（1982には増補版が同社より出版され、1992に福武文庫版が出された）
- 13) 鈴木潔、1980、ターラー、グルデン、グロッシェンなどドイツ・ロマン派研究資料—、同志社商学、377-395、同志社大学商学会
- 14) 中山純、2000、ポケットプログレッシブ独和・和独辞典、小学館
- 15) 厚生労働省政策統括官付参事官付世帯統計室、2023、2022（令和4）年国民生活基礎調査の概況、厚生労働省、<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/14.pdf>、2024年10月12日閲覧
- 16) 阿部彩、2010、子どもの貧困—すべての子どもの幸せのために—、日本大学経済学部経済科学研究会、第177回
- 17) 牟田和恵、1996、戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性—、新曜社

- 18) ヴァルター・トリーア、奥田桂子訳、2004、リリパットーヴァルター・トリーアの世界―、ピエ・ブックス
- 19) 法務省法務総合研究所研究部、2013、平成15年版 犯罪白書―変貌する凶悪犯罪とその対策―第5編／第3章／第2節／5、https://hakusyo1.moj.go.jp/jp/44/nfm/n_44_2_5_3_2_5.html、2024年10月11日閲覧
- 20) 法務省法務総合研究所研究部、2024、令和5年版 犯罪白書―非行少年と生育環境―第7編／第5章／第5節／1、<https://hakusyo1.moj.go.jp/jp/70/nfm/mokuji.html>、2024年10月12日閲覧